



人、 旅に暮らす

足立倫行

人、旅に暮らす

足立倫行

日本交通公社

著者略歴 昭和23年鳥取県境港市に生まれる。昭和45年早稲田大学政治経済学部中退。アメリカ、メキシコに約1年半滞在の後、若者向け週刊誌のライターとなる。昭和53年以後フリー。現在、紀行ルポ・人間ドキュメントを中心にノンフィクションの分野で活躍中。

人、旅に暮らす

昭和五十六年五月十五日 初版印刷

昭和五十六年六月一日 初版発行

著者 足立倫行

発行人 宮越茂夫

発行所 日本交通公社出版事業局

東京都千代田区神田鍛冶町三—三 〒101

編集部直通 ○三—二五七—八三六六

図書のご注文は交通公社出版販売センターへ

東京都千代田区神田須田町一—十二 山萬ビル

電話 ○三—二五八—〇九九八

振替 東京七—九九二〇一 送料実費共二七五円

印刷所 凸版印刷株式会社

定価 一、二〇〇円

検印廃止

©Noriyuki Adachi 1981 無断転載複製を禁じます 56-048
Printed in Japan 0026-801130-5847

目次

バンクの渡り鳥

競輪選手・小山靖（31歳）。もがきに腕いて莫大な賞金を稼ぐ黄金の脚。その得主の旅は場内をとよもす観衆の狂乱とは異次元の、ひたすら静かな旅だった

7

鯉の仕掛人

日本海に沿って走る寝台特急へつるぎ。毎週欠かさずこの列車の客となる男、観賞魚問屋・細内喜太郎（42歳）。その眼光が上限定しと言われる泳ぐ宝石を鑑定する

29

群衆の中の狩人

警視庁捜査第三課第六係、通称スリ係、警部補・中村清信（53歳）。この道三十年、地を這って獲物を狙う非情の狩人は、血も涙もある誠に日本的な鬼刑事だ

51

密室の調律師

全国に二万軒あると言われるラブホテル。急成長をとげたこの業界の影の演出者は、スケベなことをマジメに考える、怪物、だった。特殊ベッド製造販売業・橋場功雄（39歳）

73

メルヘンの調教師

鈴木清司（23歳）。ロボット動物製造リース業。本物そっくりのロボット動物を引き連れて全国を行脚する色白の青年は、プロ級の腕を持つ奇術師でもある

97

深海の軽業師

潜水夫・高田照義（29歳）。奄美の海に散った父の遺志を受け、南へ北へ、日本の海を股にかけて果てしない水面下の旅を続けるプロフェッショナル・ダイバー

119

大地の監視人

分速十メートルで無辺の山野を旅しつつ、十分の一ミリの極小世界に目を凝らす
国土地理院の測量官。豊田友夫（24歳）。精密さに青春を賭けた観測の旅は続く

141

票田の開拓者

寒川一郎（44歳）。政治の舞台でスポットライトを浴びる「主」に付き従い「影」の
使命に精励する国会議員秘書。選挙告示後、その票集めの旅はがぜん厳しさを増す

163

花園の漂泊者

養蜂家・峰田恒雄（67歳）。二百数十万匹の密蜂とともに、今年も超俗の老養蜂家は
南国静岡から北海道へと渡り歩く。密蜂に憑かれた花のジブシーの年々の旅が……

187

金の卵の鑑定士

かつてホークスの名選手で鳴らし、いまチームの明日を担う隠れた逸材を求めて
奔走する南海球団スカウト・堀井数男（56歳）。観戦の旅に目こぼしは許されない

209

聖堂の魔術師

「楽師の女王」・バイプオルガン。四年間のドイツ修業時代を経て、いま深遠なる音色
世界の創造に取り組む津田祐雄（36歳）は日本のオルガン・ビルダーの第一人者だ

233

華麗なる伝道師

後藤昌弘（45歳）。花展・審査会・講習会にと華の道を説き歩く「小原流」指導員。
その旅は、天性のバランス感覚に支えられた様式美の普及・伝導の旅と言える

255

あとがき

277

写真 景山正夫
装幀 大木眠魚

人、旅に暮らす

バンクの渡り鳥

北の函館競輪場から南の熊本競輪場まで全国に競輪場は五十ヶ所ある。中央競馬は十ヶ所、競艇二十四ヶ所、オート六ヶ所だから、同種競技と比較するとその開催場の数は格段に多い。従って、総数四千二百名にのぼる日本の競輪選手たちは、ほぼ一年中、それも頻繁に、列島各地の競輪場へと旅をすることになる。一人あたり毎月の旅行回数は二回強、年間平均二十六回。一ヶ所での滞在期間は（日本選手権など年四回の特別競輪を除くと）一律に三日間ときまっている。

昭和五十四年十月二十五日、滋賀県大津競輪場で開催された『びわこ競輪』は、この年選手生活十年目を迎えたA級一班の小山靖（31歳）にとって二百二十四回目の旅だった。

1

競輪選手に体重制限はない。よく食べる。大津へ発つ前の晩、小山靖が見せた食欲も、現役の選手らしい旺盛なものだった。

大小のトロフィーが並ぶ明るく暖かい部屋で、小山は妻の運ぶ手作り料理を次々とたいらげた。鳥すきを、キンキのひらきを、クラゲの酢の物を、煮豆を、野菜サラダを、漬物を、百六十六センチ・七十二キロの小柄ながらガッシリした身体に、小気味よいテンポで放り込む。ビールを二本あけたあと、地元宮城県のササニシキも茶碗に大盛り二杯、しっかりと食べた。

妻のひろみ（30歳）はそんな夫を満足そうに見守り、食べ終わるとすぐに熱いお茶の入った湯呑

みを差し出した。

「量はそれほど多くないと思うんですけどね。競走に行ってしまうとあまり食べないらしいから……。とにかく、目の前にお皿がいっぱい並んでないと気がすまない人なんです。ね？」

ほっそりした身体つきに短くまとめた髪、そして時折見せるいたずらっぽい言葉遣いのせいか、この妻にはどこかまだ少女の面影がある。少なくとも三人の子の母親には見えない。

小山は湯呑みを握ったまま頬だけ笑って聞いていた。太い眉、見開いた眼、頑丈そうな顎の線が際立っている。パーマをかけた頭髮と真っ赤なセーターは現代風だが、その真っ直ぐに伸ばした背筋と意志的な光を放っている瞳は、全体に一昔前の家長を思わせる。そういえば、三人の子供たちは先ほどから同じ部屋の厚い絨毯の上で転げ回って遊んでいるのに、一人として父親の側にこようとしていない。ハシャギぶりにも節度が感じられる。

一家の主人である小山はやおら口を開いた。相変らずの丁寧な口調、東北訛。

「僕らの仕事、ハングリーじゃなきゃできないです。人が炬燵でミカン食ってる時に、鼻水垂らして自転車踏むんですもんね。雨の日でもがきますから。僕はA級一班に上がった二十四歳の時に思ったんです。借金して家建てて、それ、五年で返そうって。そうすれば五年はA級一班にいれるだろうって。選手四千人のうちでA級一班はたった百二十人でしょう。毎年二百人の新人が出て、成績の悪い二百人が廃業させられるんですから、厳しいですよ。油断してたらすぐ二班・三班そしてB級と落ちちゃいます。何でもいから自分で闘争心をかきたててなくちゃ。新しい家、新しい車、目標は何でもいいんです。家に帰って子供抱くのが一番の楽しみになったら、選手としては、

ま、オシマイです」

一口つーッとお茶を飲み、

「ほんとに、毎日が自分との闘いですよ」

駄目を押した。

昨年二千七百六十八万円の賞金を稼いだ男は逞しい首をややかしげ、キラキラ光る目で真っ直ぐこちらを見ている。気負っている様子はなかった。自分の言った言葉を額面通り信じているふうだった。小山は、たまに飲み屋などでサインをせがまれると必ず「忍耐」と書く。「忍べ耐えよ己れの忍耐は己れの将来に益あらん」、余白があるとそう書き添えたりもする。自分で考え出した座右の銘だった。板に刻み込んで客間に掲げている。この「忍耐の哲学」によって小山は、十年間の選手生活を生き抜いてきた。二十五歳の若さで仙台郊外泉市の丘陵地に敷地百坪建坪五十三坪の瀟洒な住宅を建てた。三人の子供を養い、妻にフォルクスワーゲンのゴルフを買い与え、先日自らもベンツ280Eを新たに購入した。「毎日が自己との闘い」と信じ、素直に言い切って悪い理由はどこにもない。

しかし、それにしても、と僕は思った。

「強くなる」というひどく漠然としたゴールを思うと、盆も正月もない毎日四時間の練習は余りに単調で厳しすぎる。正規の報酬である賞金は別にして、継続的な息抜きが必要だと思った。食べた飲み飲んだりではない何か。家庭でのくつろぎがその何かでないとすれば……。僕は、数時間前ロード練習に同行した時のことを、思い返していた。

この日小山は、いつもなら午前と午後にかけて二回行う練習を、午前中二時間ほどの軽い足慣らし程度のものにとどめることにした。レースを目前に控え大切な足を疲れさせないためだ。だが、軽い足慣らしといっても起伏の多い一般道路を約五十キロ、普通人なら弁当持ち半日がかりの距離である。

小山と近くに住む三人の練習仲間は、国道4号線を走っていた。僕はカメラの景山正夫と一緒に、小山ひろみの運転するゴルフに乗って彼らを追っていた。

国道ではさほどスピードは出ない。いや、実際は出しているのかも知れない。周囲五十八センチ、鍛えあげて女性の胴回りほどある太股が、骨細の自転車を両脇からはさみ込むようにして、まさに、もがいているのだから。けれども、道路ぎりぎり、ガードレールを舐めるようにして走っている姿を見ると、スピード感を感じない。ドス黒いバスの排気ガスを全身に浴び、地響きをたてて通過するトラックに危うく接触しそうになりながら、自転車の一群は黙々とペダルを踏んで行く。

「そうですね、大変といえば大変です」

八年前に結婚して以来まだ一度も夫のレースを見たことがないという妻が言った。

「三十キロくらい離れた主人の実家へ遊びに行く時でも、私と子供たちは車で行って、パパだけは自転車踏んで行くんですよ」

家族で出かける時いつも父親一人が自転車で行くのを見ていたためか、長男の雅弘（5歳）は、「パパみたいに選手になりたい？」と訊かれると必ず、「一人ぼっちでさびしいからヤダ」と答えるという。

「私も、いまは仕事に専念してもらいたいと思いますが、将来のことは、店を持つとか商売をやるとか、いろいろ考えてます。でも、主人の前ではその話はしません。ちょっとイヤな顔しますから……。子供たちが大きくなって、ババも選手を辞めたら、二人でどこかヨーロッパあたりのんびり行ってみたいんですけどね。でもその頃になったら、あんがいお金がもったいなくて、結局どこも行かないかも知れませんね、フフフ」

と、その時、スピードをあげた小山が、右手を上げながら車の前に回り込んできた。

「ママ、ふらふらしちゃダメじゃないか。車線はみ出してろぞ、ちゃんと前方を見て」

「ハイッ、すみません」

目だけギラついた汗まみれの夫の顔に、競輪選手の妻はベコンと頭を下げた。

小山ら四人は国道4号線を北上し、途中で左に折れて泉ヶ岳の麓へと向かった。とたんに交通量は減り、あたりに純東北農村風な風景が展開する。稲刈りを終えた田圃、柿の木のある薬茸き農家、木造二階建ての小学校、みごとに色づいたなだらかな山々……。その絵の中を脇目もふらず、一直線となった銀色の車輪が駆け抜ける。上り坂ではあえぎながらやや乱れ、下り坂ではその分スピードを増して何台もの車を追い越して行く。さすがにこうした絶好の練習場では、より速く走るため一本のネジにいたるまで無駄なく作られた競走用自転車は、本来の性能美をいかに発揮する。実に速く、滑るようだった。

幾つかの山を越え、幾つかの村を越えたところで、小山は停止した。

僕は車を降り、小山に話しかけた。

「ところで、息抜きには何をしてます？」

「そうね、趣味って別にないから……」

小山は妻の手渡した分厚いバスタオルでゴシゴシ顔をこすりながら言った。

「酒、ゴルフ、麻雀もそんなに熱中する方じゃないし、んーと、飲み屋の女の子らと人生論やるのはワリと好きだけど……」

飲み屋の女の子との人生論……。僕はその時、小山のしごく当り前な顔つきにもかかわらず、冗談かと思った。

翌朝、小山は六時三十分に起床した。仙台空港までどんなに混んでも車で五十分、八時十分発の飛行機に乗るには七時に家を出ればじゅうぶん間に合う。

顔を洗って服を着換えると、すぐに小山は一階奥の部屋に入った。部屋の一角に作り付けのかなり大きな神棚が二つ並んでいて、そのそれぞれに線香をあげ、手を合わせる。

小山の父親と妻ひろみの父親、それに小山家先祖代々の霊を祀ったものだ。

「これだけは毎朝欠かさないんです。以前競走で落車が続いたことがあって、知人に相談したら、先祖の供養はちゃんとやってるかって言われたんですね。反省して、それ以来、せめて身近なご先祖さまぐらいはと思って」

障子越しに青い朝の光が差し込む静かな室内で、小山はかなりの時間、頭を垂れていた。小山は自分では「無宗教です」と言っている。無神論者でも勝負師の場合、こうした光景はありうるもの

だが、僕はむしろ小山個人の性格を感じた。小山靖の生真面目さには、飲み屋の女の子との人生論「同様やはりどこか一途なところがある」。

先祖に今回の《びわこ競輪》で落車・失格などの事故がないよう祈り終えた頃、子供たちが起き出し、二階の子供部屋からバタバタと降りてきた。けれども、父親の出発前三十分間のスケジュールはすでにきまったものだ。相手になってゐる暇はない。小山は玄関に行き、昨夜寝る前に用意しておいた輪行バッグをもう一度点検しはじめた。

大人二人がすっぱり入るほど大きなその扇型の皮バッグには、競輪選手の商売道具一式が入っている。分解した自転車本体、ヘルメット、スパイク、皮手袋、予備のタイヤ、修理用工具、等々。ビーエス社製の競走用自転車そのものは約十二キロと軽いが、付属品を含めると一式で二十キロを越す。

「重いでしょ？　五・六年前までは汽車で出かけてましたからね、大変でしたよ。こんな重いので乗り換え駅の階段を昇ったり降ったり。それだけで疲れちゃって、とても競走どころじゃなかったですよ」

バッグの運搬と身体の疲労度を考えると飛行機の方がラクだと言う。もちろん一番ラクなのは、遠征せずに地元のレースにばかり出場することだが、これは不可能だ。教育県を標榜する宮城県に競輪場はない。たとえば仮にあったとしても、施行者（各地方自治体）が出場選手を指名し、日自振（日本自転車振興会）がその斡旋をする現在のシステムが機能している以上、選手個人に出場選択権はない。斡旋されたレースを断る権利はあっても別のレースを希望する権利はないのだ。賞金を